

天皇誕生日

令和五年二月二十三日

天皇誕生日メッセージ

「穏やかな2023年」

天皇誕生日に際し、一言ご挨拶を申し上げます。

まずは、天皇陛下におかれましては、2月23日に63歳の御誕生日を迎えられることを、在ボリビア日本大使館一同、心よりお慶び申し上げます。

ここ数年、新型コロナ・ウイルスの感染拡大、気候変動による異常気象、ロシアによるウクライナ侵攻等により、我々の社会生活環境は大きく変化しました。そうした中でも、常に国民とともにあって、世界の平和と、人々が互いに助け合い・支え合いながら進んでいくことを常に願われておられる天皇陛下の思いを踏まえ、我々在ボリビア日本大使館も、日本とボリビアの良好な関係維持と両国国民に寄り添った活動を引き続き進めて参る所存です。

私は、2022年10月、皇居の松の間において、天皇陛下より特命全権大使任命の認証をお受けしました。陛下と対面する際は視線を合わせてはいけないと勝手に思い込んでいましたが、侍従の方から「しっかり視線を合わせるように」とのご指導をいただきました。実際、陛下は柔らかな笑顔で、緊張していた私に優しい視線をお返し下さいました。また、1992年にスペインで開催されたセビリア万博のジャパンデーに皇太子のお立場で今上天皇がご列席された際、ジャパンデー開催事務局の一員として式典関連の業務を担当していた我々事務方にも優しいお心遣いを頂いたことを今でも鮮明に覚えています。皇室儀典に不慣れな我々は、おそらく、世が世であれば～な粗相を重ねていたと思いますが、準備を進める我々を常におおらかに労って下さいました。これも陛下の国民に寄り添うお取り組みの一つであったと感じています。

2023年は、日本が国連の非常任理事国になり、5月には先進国首脳会議が広島で開催されるなど、世界における日本の役割がますます重要になる年です。こうした中、私も在ボリビア日本国大使として、引き続き積極的に活動して参ります。

天皇陛下のお気持ちを皆様とあらためて共有し、皇室の弥栄と、皆様のご健勝を祈念し、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



小野村拓志 大使



天皇皇后陛下並びに愛子内親王陛下

天皇誕生日

なぜ日本は天皇誕生日を祝うのか？ 日本には建国記念日があるのか？



第一回国勢調査の表紙の絵柄として選ばれた神武天皇。1920年。
パブリックドメイン写真

ほとんどの国は、建国や独立を記念してナショナルデーを祝うが、日本は人の誕生日をナショナルデーとして祝う数少ない国の一つです。

天皇の歴史

天皇陛下の歴史的な祖先は、生没年や統治が確実な6世紀の欽明天皇、あるいは記録はないが実在したとされている3世紀の応神天皇にさかのぼることができる。さらに遡ると、古代の伝説に登場し、日本最古の歴史書である『古事記』や『日本書紀』に収められた40代の天皇の年代記を持つ神武天皇に行き着くのである。

神武天皇は、天照大神の玄孫であり、天照大神が天から降ろしてきた瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）の孫で、その存在によって西日本が平定されたとする神話がある。

瓊瓊杵尊の子孫は、天照大神の領域を平定する使命を継続し、東日本に拡大した。そして、天下統一を果たした後、首都を建設し、天下統一を主導した神武が初代天皇として即位した。

日本の神話を知らない人にとって、瓊瓊杵尊の登場から歴史を計算すると、日本は約3000年の歴史を持つということになる。興味深いことに、神話や伝説では、瓊瓊杵尊は31万8千年以上、その二人の後継者はさらに長く、神武天皇の到来まで君臨したとされているのである。

日本に建国日というものはあったのか？

神話によると、紀元前660年1月1日、神武天皇が新しい国の皇帝として即位した。

1872年、明治維新の一環として、日本は太陰太陽暦からグレゴ



天皇皇后陛下

リオ暦に切り替わった。その結果、明治5年（1872年）の12月2日の翌日は12月3日ではなく、明治6年1月1日（グレゴリオ暦では1873年1月1日）となった。この変更は、神武天皇の即位日の算出にも影響し、毎年2月11日に祝われるようになった。

しかし、科学的な見地から、現在の日本に発展した大和朝廷の起源について、歴史家はその正確な年代を知らない。

日本の元号

神話に厳密に従えば、初代天皇は神日本磐余彦天皇（かんやまといわれびこのすめらみこと）である。神武と呼ばれるようになったのは、彼の死後である。

日本では、天皇の在位期間は特定の名前で識別される。例えば、今、徳仁天皇陛下は在位5年目であり、日本人にとっては「令和5年」である。有識者会議が選んだこの元号は、ス

ペイン語では “bella harmonía” と訳することができる。

現在の天皇の父は明仁上皇陛下であり、その時代は平成と呼ばれていた。

陛下の祖父であった昭和天皇は、存命中は「裕仁天皇陛下」と呼ばれていたが、現在は諡号（おくりな）で呼ばれています。

式典

天皇陛下が即位されて以来、毎年2月23日は「天皇誕生日」であり、1960年にお生まれの陛下は、2023年には63歳になられ、神話の神武天皇から数えて、日本では126人目の天皇である。

日本では天皇誕生日は、大臣や様々な分野の代表者を招いての宴会や、各国の外交団長を招いての茶会などで祝われる。例年、一般人を皇居に招いて天皇誕生日を祝っていたが、2021年はCOVID-19の蔓延を防ぐため、一般参賀は中止となった。

天皇の重要性

日本国憲法は、天皇を国家の象徴と定めている。

皇室の成り立ちや国の歴史が神話の中で融合していることを考えれば、日本にとってこの象徴の価値を認識することは間違いない。

また、天皇は、楽しい時もつらい時も国民に寄り添い、良識ある姿勢で行事に臨まれる。今年の新年一般参賀でのお言葉は、すべての人々の幸せと発展を祈ることに重点が置かれた。

他方、憲法は天皇を国民統合の象徴とも定めている。これは口で言うのは簡単だが、公人として何をなすべきか、深い思索を必要とする根本的な使命でもある。

国民統合の象徴として、その言動には細心の注意を払わなければならない。公平であると同時に、国民に対する熱い思いがなければならない。



日本酒

3世紀の史料には、「人性嗜酒（さけをたしなむ）」と記されている。また、775年の光仁天皇の誕生日を祝い、臣下が好物の酒でもてなしたという記録も残っている。また、2024年のユネスコ無形文化遺産登録に向けて、日本の「伝統的酒造り」を提案中でもある。

ここでは、日本酒の基本を解説し、その微妙な違いを楽しんで（できれば感じて）欲しい。

日本酒

日本酒と、簡単に言うと米を水中で発酵させて作るアルコール飲料である。スペイン語圏では、「サケ」とそのまま呼ばれている。

米

酒造りには、適した米粒があり、一般的に和食で消費される米粒より大きく、酒造好適米は100種類近くある。

普通、酒造好適米としては、心白（しんぱく）がしっかりと白く見えるものが理想だとされている。光に透かすと、米粒が透けて見え、品種によっては、一粒一粒に白っぽい芯が見えるものがあり、これが「心白」である。良い酒は、良い心白の米から生まれると言われる。そのためか、山田錦と五百万石が生産量の6割を占めている。

精米歩合

どの日本酒のラベルにも書かれているのが、「精米歩合」。これは米粒の精米度であり、例えば



左から、食用米粒、心白入りの酒造りに適した米、精米歩合70%の粒、精米歩合40%の粒。

70%という数値は、もともとの玄米から表層部等の30%を取り除いたということを意味する。この場合、米の一粒一粒は、米の特徴である細長い形状を保っている。一方、精米歩合40%では、真珠のよ



うな小さな球状の米粒になる。

精米は、相対的に心白の比率を高めるために行われる。

醸造アルコール

日本酒には、水、米、麴（酒酵母を発酵させるための特別な米）の他に、醸造アルコールと呼ばれるサトウキビの発酵したアルコールを含むものがある。

日本酒によっては、醸造アルコールを使用しないものもあるが、風味を変えるために少量だけ使用したり、軽い酒にするために米の重量のほかに醸造アルコールを50%まで使用するものもある。酒造家が目指す風味によってすべてが決まり、受賞歴のある酒の多くは、醸造酒の風味とバランスが取れているのである。

アルコール度数

日本酒や清酒のアルコール度数は、法律で22度未満と決められており、日本酒と同じ製法で46度まで製造するメーカーもあるが、その場合は「リキュール」に分類される。

一般的に日本酒のアルコール度数は15度～16度だが、6～8度の軽い酒を好む人向けの日本酒もある。

特定名称

日本酒には、米の種類や造り方によって、吟醸、純米、本醸造の3種類の名称がある。この3種類から、大吟醸、純米吟醸、特別本醸造などに細分類される。

吟醸は、精米歩合は50%から60%であり、低温で長時間発酵さ

吟醸

せる。熟練の技が必要とされ、酒造りの技術の粋を集めたと評される。

純米

純米酒の特徴は、醸造アルコールを使用しないこと。つまり、麴を使うこともあるが、米粒のみで作られた酒である。

本醸造

本醸造は、醸造アルコールを使用することで、より滑らかで軽快な味わいになる。ほとんどの日本酒には醸造アルコールが含まれている。

ボリビア産コーヒー豆の普及：日本人女性の貢献

情熱で世界を繋ぐ 情熱で

コーヒーのダイレクトトレード・プラットフォームであるTypica（ティピカ）に勤める、鈴木麻衣さんにインタビューをしました。鈴木さんは、インタビュー中笑顔を絶やさず、ボリビア、そして自身の仕事への愛情が感じられました。彼女曰く、
「コーヒーで世界を繋ぎたい。」



「コーヒーにビジネスはあるのだろうか。」

その問いに答えるには、日本のような国へのコーヒー輸出の戦略を考えるか、成功した人たちの物語に惚れ込むか、2つの方法がある。今日は2つ目の方法についての会話をお届けする。

貿易や国際協力の専門家がよく繰り返す考え方のひとつに、大きな市場を持つ国に輸出するには、生産量の多さと安定した品質を確保する以

外に方法はない、というものがある。しかし、小規模生産者生産量は、コンテナ1個分にも満たず、最初から切り捨てられることが多いのである。彼らの出荷単位はキログラムだが、大市場のそれは18トンのコンテナを満たさなければならない。

2016年、日本のコーヒー焙煎業者のグループが、キューバのコーヒー農家の輸出能力向上を支援したいと考えた。当初は、複数の生産者をグループ化することで、輸出先国の需要に応じた量を確保するという古典

的なコンセプトに基づくアイデアであった。しかし、プロジェクトが動き出した矢先、ここ数十年で最も強力なハリケーンの一つであるイルマが、プロジェクト全体粉碎したのである。

2017年8月から9月にかけて発生したこのハリケーンは、コーヒー生産者が直面する一連の苦悩のエピローグであった。プロジェクトは機能していたものの、生産者が受け取る価格は1キログラムあたり8セント程度と非常に低いものであった。この現



実とハリケーンの被害に打ちのめされた日本人たちは、コーヒー農家を助けるための代替策を検討した。彼らの夢は、「コーヒー農家のために世界を変えたい」という他愛もないものだった。

世界を繋ぐことになる衝撃

キューバでの悲劇と同時期、ボリビア育ちの日本人女性、鈴木麻衣さんは、日本の友人たちにプレゼントするために、おいしいボリビアコーヒーを探していた。旅土産を購入するというのは、日本の習慣であり、ボリビアに住む日本人は、塩やコーヒーといった、世界共通でありながら、世界でただひとつのもの（ウユニやボリビア産）を買うことが多い。

鈴木さんはもともとコーヒーが好きだったが、今ほどコーヒーのことを知らなかった。そんなとき、「エボ・モラレス・アイマ大統領杯コーヒートーナメント」で入賞したコーヒーを探しに行ってみたらどうだろう、と思ったのだそうだ。

そこで、鈴木さんは運命の出会いをした。

ボリビアで面白いコーヒーを探していた3人の日本人バイヤーと知り合ったのだ。彼らと鈴木さんは親しくなり、一緒にホンジュラスに農園を訪ねようという話になった。

鈴木さんは、スペイン語、日本語の通訳として同行した。

最初の農園に到着すると、日本人バイヤーはすでに10年前からこの生産者からコーヒーを買っていることを知った。挨拶も旧知の仲である。しかし、通訳を交えての初めての会話の中で、日本人とホンジュラス人は、これまでお互いに伝えられなかったいくつかの考えを共有することができた。通訳の価値は、「どれだけ人と人を結びつけるか」で測らなければならないこともある。その日、鈴木さんは世界の両半球がつながったことを実感した。

この旅で感じた心地よさから、もっとコーヒーについて知りたいと思うようになった。コーヒーの淹れ方や試飲の講座に通い、愛好家たち

と知り合うなど、できる限りの勉強をするようになった。そして、ホンジュラスの時と同じように、ボリビアのユンガスなどのコーヒー産地へ行き、生産者に直接会いに行くようになった。

Typicaモデル

2019年末、キューバでプロジェクトに挑戦した日本人は、直接取引用のオンラインプラットフォームを基盤とした、新しいビジネスモデルを思いついた。彼らは、物事の根源や本質に近づきたいという思いを込めて、原種に最も近いと言われる豆の品種にちなんで「Typica（ティピカ）」と名付けた。

これは単に象徴的なアイデアではない。ティピカの強みは、農家とロースターが直接コンタクトを取ることにある。古典的な国際貿易システムでは、東京のロースターのオーナーは、ラパスのユンガス地方のコーヒー生産者のことはほとんど知らないだろう。仲介業者だけが、サプライチェーンの末端を知っている

に過ぎない。

一方、生産者と直接触れ合うことで、日本のロースターは自分たちが調合するコーヒーについてより詳細に説明することができるようになった。もはやアロマやボディ、味わいだけでなく、農家とより密接につながり、その背景にあるストーリーを知ることができるのである。

パンデミックと第二の衝撃

Typicaのメンバーには、すでに明確なアイデアがあった。プラットフォームを機能させるためには、日本を出て、産地との接点を見つけないといけないということだ。

この時、第二の衝撃が襲った。コロナウイルスによる世界的パンデミックである。

ボリビアでも、世界の他の地域と同様、パンデミックの初期は不安と恐怖に満ちていた。各国がとった措置は貿易に影響を及ぼし、ボリビア

のコーヒー農家も例外ではなかった。

農園主たちは、パンデミック時にコーヒーを買ってくれる人はいないと、鈴木さんに電話をかけてきた。友人たちを助けるために、ホンジュラスと一緒にいった知人などに電話をかけた。

一方、地球の裏側では、ティピカの創業者である山田氏と後藤氏が、農場を探しに行く予定のボリビアで、協力してくれる人を探していた。鈴木さんは、運命の出会いかどうかは知らないが、創業者たちから電話をもらったのである。

人に寄り添い、情熱に裏打ちされたモデルのインパクト

現在、Typicaのプラットフォームは3年目を迎え、32カ国で稼働しています。日本だけでも400以上のロースターやコーヒーショップが登録されており、ボリビアでは9つの農園が

参加している。

このビジネスモデルが持続可能であるためには、農家にとって良い価格が保証されていなければならない。そうでなければ、創業者の当初の目的を果たせないからだ。一方、良い価格を確保することで、将来の収穫に向けた良質な豆の供給が保証される。

また、すべての豆を混ぜ合わせるシステムではないため、生産者が独自のブランドを表示できることもこのモデルの魅力である。それぞれが自分のスタイル、フレーバー、ブランドで商品を販売するのである。

また、購入希望者に穀物のサンプルを送ることで、品質に応じた価格を設定しやすくする仕組みもある。

このモデル以前は、ボリビアの生産者はブレンド収集システムでコーヒーを販売し、例外なくキログラムあたり5ドル程度の値しか付かなかった。しかし、Typicaのモデルで





は、最低でも8ドル、また、20ドルを超える成功例や、100ドルを超える例外的な例もある。

買う側からすれば、差別化された豆がリーズナブルな価格で手に入り、しかも事前に試飲ができるという安心感がある。これこそ、ディーブなコーヒー好きがデザインしたモデルの差別化ポイントに違いない。

考え方の転換点

鈴木さんによると、ティピカブランドが登場する以前は、農家はおいしい豆をつくるための秘密を漏らさないようにしていた。より多く生産してより多く稼ぐというシステムで生活していたため、品質にはあまり関心がなかったのである。しかし現在では、ボリビアコーヒーの品質向上は、参加農家にとって直接的なメリットとなり、インセンティブとなっている。ボリビアコーヒーのイメージが良くなれば、自分たちのコーヒーの位置づけも良くなる。そのため、生産者が他の農家のコーヒー改良に協力する例をいくつも目撃してきた。

もうひとつの変化は、農家の人た

ちの性格である。彼らは買い手や、場合によっては特定のロースターが何を求めているのかを知るようになった。プラットフォームの参加者は、何が好まれ、何が求められているかという知識に基づいて、自分たちのコーヒーの品質について、より自信を持って話すようになったのである。

しかし、これは予想外の結果ではなかった。実際、このプラットフォームでは、生産者とバイヤーのミーティングが企画され、あるときは、世界各国の焙煎業者がボリビアを訪問し、逆に、ボリビアなどのコーヒー農家を日本に招いたこともあった。

この会議のおかげで、日本の焙煎業者は「お客さんに出すコーヒーに生産者の顔が見える」と言い、ボリビアの生産者は、日本のバリスタがより良いスペシャルティコーヒーを作るためにどうすればいいか、を知ることができたのである。

支援のための新たなスキーム

品質保証がビジネスにとって不可欠であることを考えると、生産者は

時間と資源を投入して改善しなければならない。

しかし、そのほとんどが融資を受けることが困難な状況にある。そこでティピカは、改善の可能性が高いコーヒー農家に対して資金を貸し付けるという協力体制を整えた。

この仕組みの成功例として、ボリビアでの事例があります。提携生産者の一人が穀物貯蔵システムと乾燥機を購入し、大統領杯で1位を獲得したのです。農場の品質とイメージを向上させ、収入アップを可能にしただけでなく、今後の収穫益でローン返済ができるようになったのである。

メッセージ

「鈴木さんが一番印象に残っていることは何ですか？ 2018年、鈴木さんはアメリカで開催されたコーヒーの大会に足を運んだが、ボリビアのコーヒーは1つもなかったのである。

そして、ボリビアのコーヒー農家の一人と出会い、この話をしたことからは、二人は夢を語り合うようになる。その時、鈴木さんはまだティピカに出会っていなかったが、「いつか日本に行こう」と友人と約束を交わした。

数年後、2022年末にコーヒー生産者とロースターの距離を縮めるためにティピカは日本への旅行を企画し、この生産者は東京で彼女にこう言った。「あなたが言ったことを覚えている。...あなたはやり遂げたんだ」。その友人は自分の夢を実現したことを実感したのである。

鈴木さんは、改めて世界を繋ぐことが出来たと実感したのである。



我々の誇り

大使館から発信する開発協力

本年、2名の大使館員がその職務を終える。
開発協力に携わった長年のキャリアを振り返る。

インタビューに応じてくれたのは、在ボリビア日本大使館開発協力班の茂木氏と木村氏。長年、日本の開発協力プロジェクトに携わってきた二人にとって、一つのステージを終える年がやってきた。

大使館で何年も経験を積んでいるにもかかわらず、木村氏は最も明瞭なスタッフの一人であり、彼女の助けやアドバイスが必要な人にはいつも寄り添っている。開発協力班長の茂木氏によれば、木村氏は彼の「影のボス」であり、開発協力班の「お母さん」なのだそうだ。

在ボリビア大使館に勤務した外交官の中で、茂木氏は最も長く務めているうちの一人である。在ボリビア



大使館の外交官の勤務年数は通常2～4年だが、彼は6年近く在籍し、その率直な意見、大きな心、そしてユーモアから、みんなに愛されている。

大使館で働くことになるきっかけ

1980年代半ば木村氏は、日本の若手研究者に研究の機会を提供する大使館の専門調査員として働いていた。ビクトル・パス大統領の完璧な紫のスーツ姿、ボリビア映画プロモーターのアマリア・ガヤルド氏の親切、ヨランダ・ベドレガル氏の沈黙、ウアスカル・カヒアス氏やネストル・タボアダ・テラン氏との対話など、文化担当時には色々な思い出が出来た。

その後、大使館の経理を経て、



2004年からは開発協力班に所属していた。

ロックバンドのドラマーとして世界を回るといふ夢は、自分の才能のなさを思い知らされたからだ、茂木氏は振り返る。そこで彼は、援助者として世界を旅することを決意した。そして、国際協力機構（JICA）の漁業ボランティアになった。茂木氏の人生には人より多くの逸話が残っている。メキシコのアカプルコで銃撃されたり、ホンジュラスの海で漂流した同僚の救助のために5時間もボートを漕いだりしたこともある。そのとき、ホンジュラス人の女性に捕まり、その女性が今の奥さんだという。

JICAでの勤務後、茂木氏は日本国際協力システム（JICS）という日本政府の協力事業を専門に実施する機関に移り、2017年に日本大使館の開発協力班長としてボリビアに着任した。



開発協力事務所

日本の協力といえば、JICAを思い浮かべる人が多いだろう。世界最大級の援助機関であることを考えれば、これは当たり前のことだ。大使館が管理する仕事のスキームを除いて、日本が世界に提供する政府開発援助（ODA）の運営を担当しているのである。

JICAはボリビアにも進出しており、ビルビル空港、パタカマヤとタンボケマドを結ぶ道路、病院、チチカカ湖鱒の養殖場など、100以上の大規模プロジェクトが知られている。

一方、政府間の橋渡し役である大使館には、通常、JICAとの調整を行い、正式な協定の具体化を目指している。日本大使館の場合、この協力室がAPC

（地域社会の人間の安全保障プロジェクトに対する返済不要の資金援助の略称）も担当しており、小規模な取り組みに経済的資源を付与する協力スキームである。ボリビアだけでも、APCは700プロジェクトに迫っている。自治体やNPOが大使館に依頼するプロジェクトの多くは、教育や保健の向上に重点を置いているが、この制度の恩恵を受けている分野は他にも多くある。

開発協力事業のダイナミズム

木村氏はボリビアでの協力事業が減少していると感じている。一方では、JICAがほぼ全ての業務を引き継いでいることを考えると、大使館の開発協力班の仕事は減少している。また、プロジェクトのための協力協定が結ばれることも少なくなっている。

一方、木村氏は「援助側がメディアで取り上げられることが少なくなった」という印象を抱いている。

これは、開発協力の動向を分析するためにメディアをモニターしている木村氏自身の意見である。その点では、援助資金を使った機材や工事の納入の記事を見かけることは少なくなった。しかし、ボリビアで国際援助が続いていることは確かであり、これからも続いていくだろう。

内部から見た大使館の仕事

外から見ると、大使館の仕事はい



つも面白そうに見える。当局との会議、日本との絶え間ない連絡、ニュースになるプロジェクト、時折交わされる重要な協定……。

私たちはそう考えているし、「こんなところで働きたい」という声もいただいている。

そこで、率直に、思い出のプロジェクトは何かと、茂木氏と木村氏に聞いてみた。

この点で、茂木氏はよく「水へのアクセスを改善するプロジェクトは、自分の魂を満たしてくれるものだ」と口にする。水へのアクセスを向上させるプロジェクトは、その成果がまた違った味わいになると感じている。個人、あるいは共有の蛇口から水が湧き出るのを見た人たちの喜びは、この上なく大きなものだという。茂木氏は、目に見えるインパクトのあるプロジェクトが好きなのだ。

木村氏はというと、その思い出は、多くのプロジェクトの詳細な記録であり、特に問題のあるプロジェクトはよく覚えている。また、何百という-文字通り何百という-プロジェクトの評価や翻訳をしたり、明け方まで報告書を書いたり、果てしない時間を過ごしたことも記憶している。

ボリビア人と仕事をするということ

ボリビアの公共機関の最大の弱点は、職員が頻繁に代わることである

と木村氏は語る。そのため、公共政策の推進や業務システムの強化に支障をきたしている。しかし、その中でも最も複雑なのは、援助プロジェクトの税務処理に関するものである。

茂木氏は、「制度がしっかりしている国には、国際協力は必要ない」とよく言う。そして、開発援助に携わる者は、被援助国の制度の弱さをとにかく言うべきでない、それが彼らの日常なのだから、と持ち前のユーモアを交えて結論づける。

このような弱点はあるものの、ボリビア人公務員と仕事をすると、満足感を得られることも多く、ボリビア人は、制度的な欠点を並外れた献身的な努力で補ってくれることが多いのである。

木村氏は、自分が尊敬する人たちの名前をいくつか思い浮かべた。ボリビアと日本との関係がうまくいくように、しっかりと橋渡しをしてくれた人たちだ。もうこの世を去った人もいるが、ボリビアと日本との関係が流れるように、しっかりとした

橋を架けてくれたのだ。

国と国との関係は、結局のところ、人と人との関係の上に成り立っているのである。

ボリビアとは

茂木氏はまずボリビアの治安の良さを挙げる。ボリビアを最初の任務とする若いボランティアには、注意を促す。夜中に一人で歩き、携帯電話を見たり、財布を腕にかけたりする習慣に對してだ。そして、「こんな国は世界でもほとんどない。腹部を撃たれ、そのおかげで警備を何年も任された人の言うことだから。」とユーモア混じりに言う。

ボリビアに20年住んでいる木村氏は、社会的、経済的な変化を目の当たりにしてきた。コチャバンバに住んでいたころのように、土やほこりに悩まされることはなくなり、社会的包摂が進んでいることを実感している。

二人とも、ボリビアには大きな可能性があると信じている。しかし、すべての意見が2つの陣営に分かれて

しまうことを懸念している。外から見ると、2つのグループがあり、共に進むべき道を見出せないでいるように見えるのだ。

ボリビアにおける開発協力の将来

ボリビアは少しずつ、日本のさまざまな協力スキームから卒業しつつある。一方、日本経済は数十年前のような力強さはなくなり、ボリビアは今後も成長を続けることが期待されている。

そんな中、今年退職する2人の開発協力担当者は、ODA（政府開発援助）の時代が過ぎ、ビジネスや貿易の時代が来るのを待ちわびている。

この新しい道は、間違いなく茂木氏と木村氏の後継者に課せられた使命であろう。

最後に、日本とボリビアの友好の架け橋となるべく、献身してくださったお二人の協力に心から感謝します。

